清流

題字：芳野　充

令和6年6月30日
第90号

発行所　加来不動産㈱
発行者　加来　寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

三本は自分に向いている

笑顔であいさつができていない、表情がけわしい、電話のやりとりや人の話を聴く態度がおうへいだと感じる、そのようなことを第三者に対して思うことは日常的でした。ところが、同じようなことをわたし自身がおこなっていることに気づかされました。

お客さまとの電話でのやり取りの際、内容を違えてはいけないと思い、録音しながら話をしておりました。電話をきったあと、そのやり取りを聞き返してショックをうけました。

相手からの問いに生返事をし、なんともやる気のなさそうな、あるいはおうへいな声が再生されたスマートフォンから聞こえてきました。もちろんその声の主はわたしです。当の本人にはまったくその自覚はありません。むしろ、きちんと対応している、とさえ思っていたほどです。

作者不詳ですが「人を指さすとき、三本は自分に向いている」との言葉があたまにうかびました。「相手がわるい」「あの人はできていない」と人を指さすとき、三本は自分に向いています。相手を責めるまえに、それ以上に自分のことを見つめましょう、という意味だと思います。

ついつい問題は相手にあり、こちらに非はない、わたしはちゃんとできている、と思ってしまうことが多いのですが、誰しも目は外を向いているため、相手の言動ばかり気になるものです。

現実的ではありませんが、つねに自分をビデオで撮影し、その言動を客観的に確認しない限り、自分を第三者視点でみることはなかなかむずかしいものです。

しかし、見えないからこそ人にベクトルを向けたときには、その何倍もの意識をもって自分にベクトルを向けなおしたほうがよい、と反省しました。

それ以降、自分にベクトルを向けはじめると、わたしは笑顔であいさつできている、と思っていましたが、それは意識しているときであって、それ以外では無表情だったり険しくなっていたり、また人の話を聞く態度もおうへいだと思う場面に気づかされました。

例えば相手に対して、「言葉づかいが良くないな」と感じたとき、その日一日わたしの言葉づかいに意識を向けるようにすごすと、はしばしで同じようなことをしていることにも気づきはじめました。

「人を指さすとき、三本は自分に向いている」。あるいは、「相手は自分をうつしだすカガミである」。この言葉をあたまにいれながら、素直に謙虚に自分自身を見つめなおしていこうと思います。

加来　寛